Ralph Waldo Emersonの“Rhodora”再読
–ナチュラル・ヒストリーと東洋

佐久間　みかよ

Ralph Waldo Emersonの自然観については、トランセンデンタリズムとの関連で内面的な観念性を帯びたものとして従来解釈されてきた。エマソンの観念性は、1960年代、70年代には抽象的であると批判され、Ann Douglassは、エマソンは歴史を生きていない、と評した。[1] これらへの反発からか、近年エマソンを多面的に捉えようとする傾向にともない、Lawrence Buellが指摘するように、独自の思想を打ち立てた思想家という面だけでなく、当時の政治、文学といったコンテクストにのせてエマソンは再解釈されている。[2]　そこで、本稿は、エマソンが自然をどうみていたかについて、当時の文化状況のなかでも、自然科学と東洋からの影響という視点で考察するものである。

エマソンの自然観を見る上で、自然科学と東洋からの影響について考察するのは、当時、ナチュラル・ヒストリーが一般の人にも一種の流行となっており、また、トランセンデンタリストの間では、東洋に関する興味が増していたという状況があったからである。エマソンは、科学に興味をもち、“The American Scholar”でも「歴史と科学については多くの本を読んで学ばねばならない」(CW II, 93) と科学の重要性を説いており、とりわけナチュラル・ヒストリーには大いに引かれていた。「コンコードの聖人」といわれるエマソンだが、科学との距離は以外に近い。[3]　かつてナチュラリストになろうと言ったエマソンが、はたして、アメリカの自然をどのように描いたかについて、これまでなされてきた自然科学とエマソンの関係を指摘する研究をふまえ、具体的に自然をどのようにあらわしたかという実作について考察したい。これらを考察するには、今まで看過されがちであったエマソンの詩に注目したい。エマソンの詩は従来、副次的なものと捉えられ研究自体も少なかった。[4]　しかし、エマソンは、若い頃から詩を書き、それに対する興味は終生続いた。そこで、本稿では、エマソンの描く生物について、その詩に焦点をあて、ナチュラル・ヒストリーとの関連で考察することで、エマソンの自然観を明らかにしつつ、その過程において、エマソンの東洋からの影響について詩の面から新たな指摘をしたい。

言語・文学系外国語・外国文学研究室

1．エマソンの詩

Saundra Morrisによれば、詩人エマソンに関する研究は1970年代ころが活発で、研究書が３冊出版されるが、その後、研究は下火となる。[5]　しかし、1999年に出版された*The Cambridge Companion to Ralph Waldo Emerson*にはエマソンの詩に注目した研究論文が２本収録され、エマソンの詩が再読される気配が感じられる。[6]　エマソンは、再編集されたものをのぞくと二作、詩集を発表している。そのなかでも初期の作品である“Rhodora”に注目したい。この詩は、1834年５月に書かれ、1839年の*Western Messenger*誌に発表された。Joel PorteとSaundra Morrisを編注者とする*Norton Critical*版の注によると、Rhodoraという植物は、葉より先にめだつ紫の花が咲くツツジ属の低木であるとしている（439）。当時の植物図鑑にもとりたてて載っていないような、ありふれた野の花として認識されていたと考えられる。そんなRhodoraをエマソンはタイトルとしてとりあげた。

The Rhodora:
On Being Asked, Whence Is the Flower?

In May, when sea-winds pierced our solitude,
I found the fresh Rhodora in the woods,
Spreading its leafless blooms in a damp nook,
To please the desert and the sluggish brook,
The purple petals, fallen in the pool,
Made the black water with their beauty gay;
Here might the red-bird come his plumes to cool,
And court the flower that cheapens his array.
Rhodora! if the sages ask thee why
This charm is wasted on the earth and sky,
Tell them, dear, that if eyes were made for seeing,
Then Beauty is its own excuse for being:
Why thou wert there, O rival of the rose!
I never thought to ask, I never knew:
But, in my simple ignorance, suppose

The selfsame Power that brought me there brought you.　（*CW. IX,* 24）

森のなかに誰にも知られず美しい紫の花を咲かせるRhodoraに詩人は、思わず“dear”と呼びかける。人知れず水辺に咲いた花から、その花びらが水たまりに落ち、その色にはっとさせられる。日陰になったのか、暗い水に落ちた紫の花びらがくっきりと浮かび上がる。眼は見るためにあるのなら、美しいだけで存在している価値があると耽美的な感想を漏らしたのち、美が自分にだけ知らされたことを神の意図、“Power”ではないかと感動している詩である。

この詩は、ボストンの郊外にアメリカではじめて庭園墓地として造園されたマウント・オーボンを訪ねた後書かれたものである。ヨーロッパ式庭園をとりいれたマウント・オーボンでの感想として、墓地の様子より、アネモネやシジュウカラなど植物や鳥の様子に眼を引かれ、“… seemed to challenge me to read their riddle”（Apr. 11,1834）と日記に書き記している。マウント・オーボンは、庭園として作られたものであり、いわゆる自然そのままの姿ではない。エマソンは、かつてパリの博物館でみた陳列室の秩序にも似た美しさに感動している。この詩が書かれた1830年代ころ、自然に関する４つの講演を行うが、それには博物学や自然科学への一般の関心が高まっていたという背景がある（Packer 42,Rusk 201）。ボストンでは、「誰もが鳥類のカタログをつくり、Cuvierの本を読み、甲殻類、火山、昆虫の講演を聞きにいった」（Packer 42）のである。そうした自然科学、生物への興味の増大を受けて、エマソンは花をテーマに詩を書くのである。

また、もうひとつ注目したいのは、この詩のもつ絵画的な構図である。落ちたRhodoraの花の紫とその背景となる暗い世界の構図から、当時の東洋からの輸入品である蒔絵や陶磁器の図案が思い浮かぶのではないだろうか。エマソンへの東洋の影響を考える時、思想的な面だけでない新たな側面について考察することが可能であろう。

２. ナチュラル・ヒストリアンの描く生物

エマソンの描く花には、当時でまわった図鑑からの影響がある可能性があるが、こうした図案にも変遷があった。様々な図鑑にある図案は、珍しい種類の動植物の単なるスケッチから、背景まで考慮にいれ芸術的なものまであった。ナチュラル・ヒストリーに興味を抱くエマソンが、様々な図案を見て、自分で生物を表そうとしたとき、彼一流の独自の視点を用意したと考えることはそれほど困難なことでなない。おそらくは、輸入品や本を通して珍しい

植物や動物を眼にする機会の多いボストン周辺にありながら、エマソンが描いたのはRhodoraという野生の低木であったというところに、彼の独自性がみられる。というのも、“The Humble-Bee”では、蜂と対照してでてくる花には、エマソンの花に対する興味が窺える様々な花の名が並べられているからである。エマソンがナチュラル・ヒストリーの流れをみつつ自然をどのように解釈していたかみていきたい。

ナチュラル・ヒストリーの歴史をひも解く時、西洋科学がどのように自然を理解し、それを視覚的にあらわそうとしたかという点に注目すると、分類と美学的な要素を加えることで、自然体系を制度化することを確立した歴史と解釈することができる。17世紀に入るとヨーロッパ諸国の海外進出に伴い、世界の珍しい動植物が紹介されるようになる。しかし、1660年に自然の知識を増すことを目的にThe Royal Societyが英国に設立されると、それまでの好奇心本位の世界の珍しい生物の紹介の方法に、科学的正確さが求められるようになる。動植物の記録は、ナチュラル・ヒストリーという科学として成立する。Tony Riceは、*Voyages of Discovery: A Visual Celebration of Ten of the Greatest Natural History Expedition*で、Sir Hans Sloneをはじめとして、Maria Sibylla Merian, William Bartram, James Cook, Charles Darwinらが行った航海とそれによる動植物紹介のスケッチについて解説している。この中の一人であるSloneを訪ねたLinnaeusは、彼の標本の多さに圧倒されたという。しかし同時に、その雑多な集積は、リンネに分類の必要性を感じさせることになり、リンネ式の分類体系へと発展していく（Rice 20）。

ともあれ、スローン以降、より正確な生物の記録を求めて詳細な描写が行われることになる。しかし、その動植物の描き方の変遷を見る時、リアリスティクなものから、バロック的にリアルななかにも理想を求める描き方を追求する点が指摘できよう。17世紀の女性科学者の先駆ともいえるドイツ人のMaria Sibylla Merian（1647－1717）の描く植物や昆虫の様子は、その変態の様を描きつつ彩り豊かな芸術的なものとなっている。（図１）

メリアンは、最初、女性たちに絵画などを教えていたが、一方で、昆虫などを趣味で集めていた。やがて、これらを観察することで自然科学の研究へと入っていく。本稿からはやや脱線するので詳述する余裕はないが、メリアン自身の辿った人生も興味深いものがある。当時オランダの植民地であった南アメリカのスリナムから送られる昆虫に興味を持ち、夫と別れ、この地に向かっていくのである。アムステルダムに戻って、*Metamorphosis of the Insects of Surinam*をあらわす。これは、南米の植物や昆虫を科学的に正確に、しかも、美しくあらわした画として高く評価され、また昆虫の変態の様子を記した最初の本となる（Todd ４-５）。正確なスケッチと植物や昆虫の多様な色をいかした彩色は、たとえば、

Philip Millerの*Figures of the Most Beautiful, Useful, and Uncommon Plants Described in the Gardens Dictionary*（ London : John Rivington, 1760）などの簡単な色使いのものと比べると、圧倒的に絵画的である。　Kim Toddが”Before Darwin, before Humboldt, before Audubon, Maria Sibylla Merian sailed from Europe to the New World”（４）とその業績をダーウィンやフンボルト、オーデユボンと比しているのも頷けるであろう。

ナチュラル・ヒストリーの歴史に視覚的な美しさの再現が確立されたことを意味し、これは、19世紀なかごろ*Birds of America*（1827－38）という図鑑をだし一躍注目を集めたオーデユボンの描く鳥たちにその傾向を認めることができる。オーデュボンの描く鳥には、客体を綿密に再現する科学的正確さだけでない、美学的な配慮も感じられる。オーデユボン自身が友人への手紙のなかで、“I had been in the habit of seeing, and, moreover, to complete a collection not only valuable to the scientific class, but pleasing to every person, by adopting a different course of representation from the mere profile-like cut figures, given usually in works of that kind”（ Audubon 753）と述べているように、科学的価値だけでない、人の目を喜ばせる芸術的な鳥の絵をめざしていた。その方法も剥製学の進歩の恩恵を受け、剥製を作り、鳥の構造を再現できるように何日も観察して仕上げていったのである。オーデユボンの『アメリカの鳥類』の綿密さは、とりわけ初版のDouble－elephant Folio版（29.５×39.５インチ）といわれる大型本で, 鳥の持つ色彩の豊かさが十分に再現されている。また『アメリカの鳥類』のなかで特徴的であるのは、自然の風景の中におかれた鳥の絵である。（図２）　先の手紙で、“nature must be seen first alive, and well studied, before attempts are made at representing it”とある箇所に彼の研究の方法が説明されている。生きている状態をまず観察し、自然のなかでの鳥の様子を伝えたいという思いが、鳥の生息する地を背景として加え自然の中の鳥を表象にしようとする工夫につながっている。自然科学の発展と剥製学など科学的知識の発達が、自然をより美しくあらわすことを可能にしたのである。

19世紀中頃は博物学や自然科学が流行であり、多くの家庭にはこうした図鑑がおかれていた。オーデユボンの『アメリカの鳥類』も1840年から1844年の間に小型のoctavo editionが出版されたが、その初版はすぐに1200部売れている。また、旅行記などから珍しい動植物の様子などへの人々の興味も増し、多様な自然を鑑賞する眼が養われていく。鷲津浩子が指摘するように、19世紀の科学は、それまでの演繹による哲学的アプローチとは別の帰納法的方向へ進んでいく（９－22)。その上、単なる結論を導くのでなく、普遍を重視するロマンティシズムの影響から多様なる事象のなかに、何か普遍的価値を見いだそうとする試みがなされていく。こうした時期に自然科学のなかで最も大きな論争となる進化論が発表されること

になるのである。19世紀最大の科学的論争といえる進化論論争を見る時、宗教と科学の対立の陰に、人々の心のなかには、美学的な世界の解釈という別の要素が含まれていたと考えることができる。オーデユボンの『アメリカの鳥類』にみられるように、多くの美しい動植物を本として家庭の一カ所で見ることができることになった人々の心には、自然を美しく再構成する美意識ができあがっていた。これは、エマソンが感嘆した博物館の陳列室についても同様のことがいえるであろう。自然について美をもとに再構成する人々と、自然科学として類推によって起源を知ろうとする科学者との間には次第に乖離が生まれてくるのは当然の成り行きであった。ナチュラル・ヒストリーは、こうした両極化の中間に位置していたと捉えることができよう。[7]　対立する概念を振幅して物事を考察するエマソンにとっては、ナチュラル・ヒストリーは格好の場であったといえよう。ナチュラル・ヒストリー的思考と進化論的科学は決定的にわかれていく。エマソンは、自然のなかにある花に分類された名をあてはめ、その美を発見するというストーリーに収めることで、やがて乖離することになる二つの世界観を、一つの構図におさめて詩にしていったのである。

３．エマソンの自然に関する講演

エマソンの自然観とその詩の関連を考えるうえで、自然に関する講演を考察することが必要であろう。エマソンの自然観については、1836年に発表された*Nature*によくあらわれているとされる。しかし、このタイトルはBarbara Packerも指摘するように、相反する内容の一方をあらわしたものに過ぎない。エマソンが考察していたのは、natureとspiritの関係であり、*Nature*に至るまでの考察過程を知ることが、エマソンの自然観を捉える上で重要である。“The Rhodora”は、その過程にある、1834年に書かれている。エマソンがアメリカニズムを代表する「エマソン」になるまでの1834年に注目したい。

牧師職を辞し、ヨーロッパ旅行から帰ったエマソンにとって1834年は、講演者としての新たな自分を確立していく時期であったといってよい。帰国後おこなった講演は、自然科学についての４つの講演“The Use of Natural History”（1833）、“On the Relation of Man to the Globe”（1833）、“Water”（1834）、“The Naturalist”（1834）である。[8]

エマソンのこの初期の講演集を編集したWhicherとSpillerによると、エマソンは科学への関心を終生もっていたが、最も熱心に勉強したのは、1832年にボストン第二教会の牧師職をやめてから1836年に*Nature*をあらわすまでとされる（１）。この時期は、科学勃興の時期であり、時代の注目を集める科学に、エマソンが、真のモラルを求めたとスピラーらの序文で

は解説されている。この間､エマソンはヨーロッパに行き、数々の科学に関する講義を聞き、自然博物館をまわっている。よく引用される“I will be a naturalist”という感想は、パリの自然博物館の自然史陳列室を見た時のものである。批評家たちが指摘するように、エマソンの自然に対する興味は、モラルの探求にあり、また、直接自然に触れたからでなく、自然博物館の展示を見て感じられたものである。エマソンの興味を引く自然は、展示室にある一定のテーマや筋道をもって並んでいる秩序ある自然である。自然は、混沌としたものでなく、人に何かを教えてくれるもののはずである。そうした捉え方は、*Nature*においてはっきりと示されることになる。

科学に関する講演のなかで、最初の“The Use of Natural History”では、自らが行ったパリの自然博物館の展示の様子が細かく記述されている。その陳列の様子を陸（山、沼、平原、ジャングル）と海と川という３つの自然の局面が、実に印象的に並べられていると述べている（７）。また、動物についても世界中の動物が珍しい種のものまで一望でき、ナチュラル・ヒストリーという科学の発展のすばらしさに感嘆している様子がよく伝わってくる講演となっている。この時、エマソンは、自然科学の発展を“profit”“benefit”という言葉を使い、自然がわかるようになると、人間の文明に資することができるようになると述べ、科学の発達は人間生活を豊かにすることができると繰り返し述べている。知識は、自然を知ることにとどまらず、それを人間にとって善となることのために役立てることができることを説明しているのである。

しかし、ここで付け加えておきたいのは、エマソンが人間を自然と結びつけているのは“secret sympathy”（24）であると指摘している点である。自然界は“moral truth”（25）がシンボルとなってあらされている世界であるとし、“this perfect harmony does not become less with more intimate knowledge of nature's laws but the analogy is felt to be deeper and more universal for every law that Davy or Cuvier or Laplace has revealed“（25）とやがてダーウィンの進化論を生み出すことになる進化の体系的な理解についても触れている。これは後にダーウィンの進化論を読んだ時、エマソンにとってダーウィンの本の内容は既知のことだという感想を漏らしたことにつながっていよう。エマソンは決して神の存在を否定した自然選択説を理解していたわけでない。したがって、エマソンの自然科学者としての限界を指摘することもできようが、一方で、エマソンの自然理解は科学的知識への興味に裏打ちされたもので、決して抽象的なものでないことが指摘できよう。エマソンは自然と人間の間のつながりに興味を抱く。どんな小さな生物にも、いや鉱石のような無生物にも直感的につながりを感じているとしている。

人間と自然との関係をエマソンは二つ目の講演で“The Relation of Man to the Globe”としてまとめている。ここには、進化論的な発想と同時に一種の文明論のはしりといっていいエマソンの慧眼を窺わせる指摘がなされている。まず、“It appears that the most perfect animals were at that time formed which the earth in its then condition could sustain”(30)とのべ、ここから進化論的に環境に適したものが自然を作っていくプロセスをシンプルに述べている。今の世界がどのように作られたかという考察は、当時の大英帝国の発展の基礎を石炭の確保にあったとし（33)、文明の発展と自然資源の関係から、テクノロジーへの影響まで視野にいれた文明論的思考を披瀝している。人類の発展に自然との関係は不可欠なものであるという認識は、エマソンが感じた自分と自然の間の不思議なつながりから生まれた思考である。

この講演をまとめるに先立ち、エマソンは、“By the study of nature he improves nature, and keeps the world in repair. For, if the human race should be totally destroyed, it would take not very long for the sea and the sand and the rivers and the bogs to make most parts of the earth uninhabitable by men”（44）とのべている。前半部分は、ピューリタン的な勤勉な土地活用の思想の影響がみられる。後半部分で述べられる、人間がいなければ、自然は人間が住めない状態になってしまうというくだりには人間中心的な発想が顕著にあらわれている。

しかし、エマソンはすべて人間が把握できるとは考えていなかったようである。自然に関する３つ目の講演は”Water”と題され、水の持つ力の大きさの化学的な説明からはじめ、自然界における水の力を客観的に述べている。しかし、この講演を読み進むと、エマソンの言説のなかに内在する矛盾する要素ともいえるものがよくわかるであろう。人間の力と神の存在の間でエマソンは揺れ動いているように思われる。前回までの講演で自然は人間が制御すべきものであるとしていたが、今回の講演では、神の意志の存在を次第に強調していくのである。

自然に関する最後の講演となる“The Naturalist”（1834）では、自然界のバランス、自然がそれぞれの生物、無生物にきめた場所とそのものの関係からくる美しさについてまず述べる。ところが、科学に対する警告のような一節もある。少し唐突な感じのする挿入の仕方で以下のように述べている。“But as we have to do now with its true place and influences there are some important distinctions to be made. We are not only to have the aids of Science but we are to recur to Nature to guard us from the evils of Science”（76)。この後エマソンは、人間は、自然とのつながりを失ってしまい、道具に頼らなければ自然の変化

を理解できなくなったと続けていくのである。ナチュラル・ヒストリーがやらなければならないことは、“nomenclature”でなく“classification”であるとし、自然の持つ法をあきらかにすることだとしていくのである。エマソンの宗教観と自然観の近さをここに指摘することができよう。ユニテリアンの実証的な教義に疑問を覚えたエマソンは、自然と科学の関係に対しても同じような捉え方をしている。キリストを理解する際、史実に頼るのでなく直感によるとしたように、自然の法を知るのは、道具を使うのでなく直感によらねばならないとしているのである。“The Naturalist”の講演は、自然と調和した人間の能力を強調する次の一文で終わっている。”No truth can be more self evident than the highest state of men, physical, intellectual, and moral, can be coexist with a perfect Theory of Animated Nature”(83)。

エマソンは、パリの陳列室でみた自然が自分と深いつながを持つものであるという直感を覚える。この直感をもたらしたものが何かを解明したいと“naturalist”になりたいという衝動を書き記す。そして、自然のなかに自分がみたものは、陳列室の秩序であるとエマソンは思うようになるのである。エマソンが解明したいのは、自然そのものでなく、自然の持つ秩序であった。宗教における人間の理解力・能力の価値の大きさを重視したように、科学は自然界を理解するためにあるとし、その際の人間の直感力の重要性を四つの講演を通じて確信していったと思われる。エマソンは自然についての本をあらわしたいという思いがあったが、これが実現されるのは、弟の死という精神的危機の後完成させる*Nature*によってである。*Nature*は、自然についてのエッセイを超えた一つの思想をあらわすものになった。そのためパッカーが指摘するように、構成や文章自体も日記や講演よりはるかに飛躍と屈折のあるものとなったのである。自然の秩序に興味をいだいたエマソンは、４つの科学に関する講演を通じて自然と人間の間のつながりを深く意識したといえよう。科学的な説明ではとらえられないこのつながりを論理によって表現しようとしたのが、*Nature*であるとすると、“Rhodora”では、自然の美しさとそれを発見する人間の目というテーマを通して、自然と人間と美の関係を視覚的な構図として描こうとしているのである。そして、また、この構図には、東洋の影響があると思われるのである。

４．“Rhodora”に見る東洋

Arthur Christiなどの批評からトランセンデンタリズムの人々の間で一種の東洋熱があったことが明らかになっている。とりわけ、Bhagavad Gitaなどインドの文学や孔子などの中

国思想は、トランセンデンタリストの人々の心を捉えた。[9]　これらの東洋文化の紹介は、1840年代が中心といわれている。しかし、クリスティによれば、エマソンのオリエントへの関心は、これより早く1823年の叔母への手紙に現れている（63）。日記から、かなり早い時期にペルシャの詩を読んだことが窺える記述がある。また、1834年４月にプエルト・リコにいる弟Charlesに宛てた手紙のなかで、“Where is your dissertation on China?　Where is that on Asia?”と追記する形で書き、アジアに対する関心を示している（*Letters* 409）。さらに、12月の日記には、昔から続く文明の地として”Rome, London, Japan”と記述している。これはエマソンがルターの信条について何らかの翻訳を行えば、十分理解できるものだとし、自分の既知のものとそうでないものでも照応関係で見れば理解できると続け、既知のもの未知のものとした場合の、未知のものの例として以上の３つをあげているところである（*JMN* IV 353）。ちょうど旅をしてきたローマ、ロンドンに続き、当時それほど情報の入ってくることのない日本をあげているところは注目に値する。これらは、エマソンの中にある何らかの東洋への興味を示しているといえよう。東洋の書物の翻訳は、イギリスのRoyal Asiatic Societyで出されたものを受容するのが中心で、1840年ころから多く流入する。しかし、これらに先立ち、絵画など美術について知る機会があったのではないかと推測される。Allenが指摘しているように、エマソンは少年のころからボストンのIndian Wharfに立寄っていたが、ここには東洋からの輸入品の店がならんでいたのである（56）。こうした機会を通してエマソンが東洋美術にふれ、それが自然を捉える時の構図に影響をあたえていった可能性が考えられる。

1834年は、エマソンにとって大きな転機となっていく年である。牧師から講演者へという人生の変化を迎え、エマソンが第一としたことは、*Nature*の序文にあるように、過去にとらわれない表現の仕方の追求であったといえる。1834年にエマソンは、自然科学に関する講演を行い、東洋への興味を本格化していたという点から“Rhodora”の詩を見ると、エマソンの自然の捉え方には、従来にない捉え方が窺えるのではないだろうか。そこで、もう一度、“Rhodora”の花の美しさの捉え方を見てみよう。

森のなかで、偶然Rhodoraの花が咲いているのを見つける。人気のない小川のそばに咲いた紫の花が、暗い小川に落ち、黒い水が一瞬色づく。赤い鳥がここに涼しさを求めてやってきたとしても、自らを恥じるほどその色は美しい。

こうして描かれたRhodoraは、山と川と鳥との対照で描かれるが、その基調は、人気のない暗い森、そして日陰を流れるため黒くみえる小川と、黒が中心である。花もまだ葉が茂る前に咲くので、緑も乏しい。鳥が来たならと赤い鳥を登場させるが、それはあくまで構図の

外にいる。暗いなかに、ただ紫の花が美しく散るという陰画的な美しさといえる。こうした陰画的な美しさは、東洋美術を知る私たちにはなじみのものである。エマソンも、美術品などを通じてそうしたものに出会っていたと考えられる。

エマソンの日記によれば、1832年11月に、Audubonの“The Winter's day”を参照したとある。これは、Fergusonの注によれば、Audubonの*Orinithological Biography*であろうとある。このあと、以下のような詩がのせられている。“The bee upspring / On trumpeting wings / The worm crawls still in the grass / O'er the cold November grave / Which not one kindred eye beheld / Which strangers saw/ strangers gave”（*JMN* IV 62）。オーデユボンの描く鳥と墓を対照させてエマソンはこの詩を書きつけている。これは、“Rhodora”の詩の後半で述べられる誰にも知られず地と天の間で滅びていく美を歌うイメージへとつながっていく。美しさの表現の背景に暗いイメージを対局としておいているのである。

エマソンは自分を詩人と日記で書いており、またそのエッセイには“The Poet”というタイトルのものもある。ここでエマソンは、詩人は新しいものを発見しなければならないとし、「言葉も行動である」と述べる。“A thought, so passionate and alive that like the spirit if a plant or an animal it has an architecture of its own, and adorns nature with a new thing”（*CW* vol. III, 9-10）. 詩人としてエマソンは自然を題材に新しい表現を考えていた。それは、自然と自分との不思議な関係“occult relationship”を詩の言葉で捉えようとすることであった。

エマソンは、これまでのナチュラル・ヒストリアンの描いた動植物を、陰画的な背景のなかにおくことで、そのものの美しさを再認識させようとしたのではないだろうか。かつて自然界のものは、それが自然界のバランスのなかにあってこそ美しいとしたエマソンであるが、その背景のもつ暗さのコントラストに気づいていたといえよう。エマソンの楽観論がこうした花だとすると、その背景にある暗い地としての世界は、たとえ、それが花の美しさを際立たせるものであったとしても、エマソンにとって無縁のものでなかったのである。

５．おわりに

エマソンは、後年になるにつれ、論考としてはアメリカ性を打ち出す進歩的な発言がより多くなる。愛息の死など心の葛藤や世の中の矛盾は、進歩的な結論へと向かう論考のなかに吸収されていくとも思われる。奴隷制反対運動の時の言葉による抵抗には、言語によるメッ

セージによってのみ世界を変えられると信じたエマソンの信念がよく現れている。現在のパブリック・インテレクチュアルのような役目を自分でも自覚して、発言の効果なども考慮していたからともいえよう。しかし、初期の論考には、揺れ動く心情が時に飛躍や亀裂となって表現にあらわれている。人に知られず咲く花の美しさを発見した感動をえがいた“Rhodora”には、花とそれをとりまく暗い地という対照で自然を捉えようとするエマソンのパースペクティヴが感じられる。エマソンは、対象物とその背景も考慮しひとつの構図におさめて自然を提示した。ここには、人間と自然、西洋と東洋、科学と宗教、様々な対立が顕在化する19世紀を、ひとつの構図にいれて理解しようとしていたエマソンの姿が浮かぶ。

一つの詩だけで影響関係を確定することはできないが、“Rhodora”という詩には詩人エマソンがアメリカを代表する「エマソン」というひとつのシンボルとなる過程でのナチュラルヒストリーとの関連を示唆することができよう。また、Rhodoraという花の美しさの背景になる木や水の陰画的構図に東洋をみるのは、あまりにもうがった見方とはいえ、美の発見と同時に背景化されるその運命が暗示されているように思えてならない。

図１The catalogue of“Maria Sibylla Merian & Daughters Women of Arts and Science”at the L. Paul Getty Museum

Figure 2 *Garden Hyacinth with Metamorphosis of Garden Tiger Moth*, 1679. In *The Caterpillar Book* (vol. 1, Nuremberg). Hand-colored transfer print, 20.7 x 16.8 cm (book). Courtesy of the Library of the Zoological Institute, Saint Petersburg

図２The post card of the Huntington Library, Art Collections , and Botanical Gardensより

注

[1] Joel Porteは、ケンブリッジ・コンパニオンの論集のイントロダクションで、エマソン批評の移り変わりの転機を、Quentin Anderson, Ann Dougrlasの批判においている（３）。

[2] ビュエルは、2003年に今日的なコンテクストから導いたカテゴリーでエマソンの評伝を書いた、とその序文で述べている（１-６）。ビェエルは、1999年に批評集*Ralph Waldo Emerson: A Collection of Critical Essays*,（New Jersey: Prentice Hall, 1999）を編集した際にも、エドワーズとの関連を述べるPerry Miller, フランクリンとの関連を述べるWilliam Hedgeの批評を紹介し、自分は、エマソンを彼の時代の文化的状況のなかで評価したいと述べている。

[3] エマソンと科学について、近年では、David Robinson, Laura Dassow Wallsがとりあげている。

[4] Sandora Morrisは、エマソンの詩の研究の変遷を辿り、詩があくまでその思想を理解する上で読まれたことを指摘している（219）

[5] この研究書のなかの一冊にあたる*Emerson as Poet*で、Hyatt Waggonerは、エマソンの詩の批評の変遷を詩の出版当時から振り返って考察している。エッセイなどに比べD. H. Lawrence, Yvor Wintersなど詩としては弱点が多いという批評が多いなかで、独自の詩法を評価するKreymborg, Leisohnなどもあったことを明らかにしている

[6] Saundra Morrisの論文はこのなかのもので、エマソンの詩をエッセイと同列のものとして考察し、“The Sphinx”はエマソンの特徴がよく現れていると指摘する。また、もうひとつの　Tufarielloの論文はエマソンの詩および、“The Poet”などが如何にWhitman, Dickinsonに影響を与えたか詳細に考察している

[7] 鷲津浩子は、アメリカにおけるナチュラル・ヒストリーの歴史を辿り、アメリカ的な独自の生物群を主張することでヨーロッパ的なものから脱していったとする。そして、進化論が発表される以前に流行する18世紀後半から19世紀前半の自然の捉え方は、科学というより文字通り「ヒストリー」を書く、神の意匠の具現化である「自然誌」であったとしている（165－193）。

[8] これらは、Robert SpillerとWallace E. Williamsの編集する*The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson*に収録されている。

[9] Christiの他にも、インド思想との相互関連を述べるAlan Hodder, 朱子とエマソンの関連を述べた高梨良夫などの論文がある。

参考文献

Allen, Gay Wilson. *Waldo Emerson: A Biography*. New York, Viking, 1982.

Audubon, Jon James. Birds of America.

_____. *Audubon: Writings and Drawings*. Ed. Christoph Irmscher. New York: Library Classics of the United States. Inc, 1984.

Bosco, Ronald A. and Joel Myerson. *The Emerson Brothers: A Fraternal Biography in Letters*. Oxford: Oxford UP.

Buell, Lawrence. *Emerson*. Cambridge: The Belknap Press of Harvard UP, 2003.

_____. Ed. *Ralph Waldo Emerson: A Collection of Critical Essays*. Englewood Cliffs: New Jersey, 1993.

Christy, Arthur. *The Orient in American Transcendetalism: A Study of Emerson, Thoreau, and Alcott*. New York: Octagon Books, 1978.

Dant, Elizabeth A. "Composing the World: Emerson and the Cabinet of Natural History." *Nineteenth-Century Literature* 44 (1989) : 18-44

Emerson, Ralph Waldo. *The Complete Sermons of Ralph Waldo Emerson*. Edited by Albert J. von Frank et a 4 vols. Columbia: University of Missouri Press, 1982-1992

_____ *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*. Ed. Edward Waldo Emerson 12 vols. to this day. Boston: Houghton Mifflin, 1903- 4

_____ *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson, 1833-1842*. Edited by Stephen E. Whicher, Robert Spiller, and Wallace E. Williams. 3 vols. Cambridge: Harvard UP. 1959-1972.

_____. *Emerson's Prose and Poems*. Ed. Joel Porte and Saundra Morris. New York: Norton CO., 2001.

_____. *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*, Ed. William Gilman et al. 16 vols. Cambridge: Harvard UP, 1960-1982.

_____. *The Letters of Ralph Waldo Emerson*. 10 vols. Ed. Ralph L. Rusk and Eleanor Tilton. New York: Columbia UP, 1960-1982.

Gura, Philip. *American Transcendentalism: A History*, New York: Hill and Wang, 2007.

Harding, Walter. *Emerson's Library*. Charlottesville: UP of Virginia, 1967.

Hodder, Alan D. *Emerson's Rhetoric of Revelation*. University Park: The Pennsylvania State UP, 1989.

_____. "The Best of Brahmans" : India Reading Emerson's Reading India." In *Nineteenth-Century* Prose. Vol. 30. 2003, 337-368.

Morris , Sandra. "'Meter-Making' Arguments: Emerson's Poems." Joel Porte and Sandra Morris. 218-242.

Packer, Barbara. *Emerson's* Fall: *A New Interpretation of the Major Essays*. New York: Continuum, 1982

Peterson, Roger Tory and Virginia Marie. *Audubon's Birds of America*. New York: Abbeville Press Publishers, 1990.

Porto, Joel and Saundra Morris eds. *The Cambridge Companion to Ralph Waldo Emerson*. Cambridge, Cambridge UP, 1999.

Rice, Toni. *Voyage of Discovery: A Visual Celebration of Ten of the Greatest Natural History Expedition*. Buffalo: A Firefly Book, 2008.

Richardson, Robert D., Jr. *Emerson: The Mind on Fire*. Berkeley: U of California P., 1995.

Robinson, David. "Field of Investigation: Emerson and Natural History," In *American Literature and Science*. Ed. Robert J. Scholnick. Lexington: UP of Kentucky, 1992. 74-92.

Rossi, Williamson. "Emerson, Nature, and the Natural Sciences," In *A Historical Guide to Ralph Waldo Emerson*, Edited by Joel Myerson. New York: Oxford UP, 2000. 101-50.

Takanashi, Yoshio. "Emerson, Japan, and Neo-Confucianism." *ESQ:A Journal of the American Renaissance* vol. 48. 2002. 41-69.

Todd, Kim. *Chrysalis: Maria Sibylla Merian and the Secrets of Metamorphosis*. Orland: A Harvest Book Harcourt, 2007.

Tufariello, Catherine. "' The Remembering Wine' : Emerson's Influence on Whitman and Dickinson." Porte and Morris. 162-191.

Waggoner, Hyatt H. *Emerson as Poet*.　Princeton: Princeton UP,1974.

Walls, Laura Dassow.　*Emerson's Life in Science and the Culture of Truth*. Ithaca: Cornell UP, 2003.

Washizu, Hikoro.『時の娘たち』　南雲堂　2005.